

ロンドン、スコットランドのミッドルスボロ（ミッドルス・ブルグ）、アントワープを経てベルリンに到着。フィッシャーの処で日本美術品の整理をしているところへ文部省の満三年間仏国留学を命ずという辞令（三十二年十月十三日付。一ヶ年千八百円支給。）が留いたので、翌三十三年三月にパリに移ってアカデミー・コラロッシンに入学した。和田の履歴書（本学蔵）にはこれより帰国までのことが次のように記されている。

〔三十三年〕三月ヨリアカデミー、コラロッシン入學 ラファエル、コラン、クルトア兩氏ニ就キ木炭畫及油畫ヲ修業シ又ユウジェーヌ、グラッセ氏ニ就キ裝飾美術修業

同年 佛國巴里府ニ開設セル千九百年世界大博覽會ニ油畫渡頭夕暮圖ヲ出品シマンシヨンオノラーブル授與セラレ

同卅五年 佛國巴里府開設ノ「サロン」ヘ油畫思郷圖出品ノ許可ヲ受ク

同卅六年二月三日 欧州内地旅行許可ヲ受ケ一ヶ月半佛伊兩國ヲ巡歴ス

七月十五日 歸朝

このフランス留学については和田自ら「畫壇の四十年・足跡を顧みて」（昭和九年九月〜十二月『東京毎夕新聞』に連載）その他で詳しく述べている。最近の研究では留学中の和田、特に滞欧作「こだま」と世紀末画家たちの制作との関係を論じた丹尾安典著「和田英作——世紀末のこだま」（『比較文学年誌』第二十一号、昭和六十三年）がある。

滞欧作の一部すなわち「ミッドルス・ブルグ」、「公園の夕暮」、「思郷」、フラ・アンジェリコ作「受胎告知」模写、ペラスケス作「マリアナ公女」模写、グルーズ作「少女」模写、ミレー作「落穂拾い」模写は帰国後東京美術学校に収蔵された。

和田は帰国後、明治三十六年十月十四日に本校教授となったが、同月一日の『読売新聞』に

○美術學校の新學科 同校洋畫科にてハ今期より新に速寫畫法を教授する計畫成れり 教師ハ新歸朝の和田英作氏なり

という記事があり、「速寫画法」つまりクロッキーが和田の指導で始められたことがわかる。西洋画科では明治三十六年に授業方法を改め、第二年以上に鉛筆による人物姿勢の速写と水彩画を正式な履習項目として課すことになった。また、和田の帰国が本校内外における図案振興の一助ともなったことは157頁に記すとおりである

### ⑨ 小坂象堂の死去

明治三十二年六月二日、西洋画科助教小坂象堂（本名力松）が死去。浅井忠その他によって葬儀が営まれ、日暮里の青雲寺に埋葬された。象堂は但馬出石の出身で、明治二十年から京都で南宗画、円山派を修め、陶画を描くなどしていたが、同二十七年から浅井忠に西洋画を学び、傍ら日本画の勉強を続けた。彼は浅井が本校教授となったとき（同三十一年）に、助教教授に選ばれ、日本絵画協会や日本美術協会に力作を出品。革新派の日本絵画協会といわゆる理想派が

主流を占めていたのに対して写生を基本とする自然主義的な作風を示し、注目を集めたが、業半ばにして急死した。

象堂の作風を支持したのは中村不折、大村西崖、結城素明、平福百穂、石井柏亭等々であった。象堂が死去するや、まず不折は『日本』新聞(明治三十二年六月八日、十、十二日、十四日)に望台野史の筆名で「故小坂象堂」と題する長文の追悼記事を書いた。西崖はその翌月に都鳥英喜、新海竹太郎と共著の『象堂遺芳』を出版し、友人の業績を世に紹介した。なお、それ以前に西崖は『美術評論』に象堂の作品を極力取り上げて支援していた。『京都美術協会雑誌』第八十五号(同年七月)にも養和庵主なる人の「小坂象堂死ス」と題する追悼記事が掲載されているが、これも同誌と縁故の深い西崖の執筆ではないかと思われる。京都派のなかにも象堂の支持者はあった様子である(丹青生著「後素協会の絵画(上)」明治三十五年六月十日『都新聞』)。素明、百穂、柏亭らは象堂の自然主義を受け継ぎ、それを



小坂象堂

が死去した翌年に発足する。なお、『ほととぎす』第二巻第十号にも高浜虚子の「故小坂象堂」と題する文が載っている。虚子は『ほととぎす』の挿画や美術評論記事のために四回ほど象堂と会っただけだったが、百年の知

己のようだったと言っている。虚子は同誌前号の「文学美術評論」欄(明治三十二年四月東京美術学校生徒成績展覧会の記事)では象堂の日本画改良論の一端を紹介している。

『象堂遺芳』には主な遺作が収録されているが、その多くは今日所在不明である。本学には代表作「野辺」(明治三十一年)と油画「海辺松林」(同)の二点が収蔵されている。

#### ⑩ 瀧精一の起用と美学講義

森鷗外の後任として明治三十二年九月十一日に瀧精一が嘱託(美学担当)を命ぜられた。瀧は明治六年生れ。南宗花鳥画家瀧和亭の子で、号は拙庵。のちに東京帝国大学教授、帝国学士院会員、文学博士となり、一方では明治三十四年より歿年の昭和二十年まで『国華』の編集の主軸となるなどしてわが国の東洋美術史学に大きく貢献する。

瀧は明治三十年七月に東京帝国大学文科大学を卒業し、さらに大学院で美学を専攻。一年志願兵として入営後、本校嘱託となり、同三十四年八月まで在任した。同四十二年九月より同四十四年十月の間も再度嘱託となっている。最初の起用の際の講義は西方春叢(本名俊造、明治三十六年日本画科卒業)の受講ノートによれば、序論で美学の字義、バウムガルテン、カント等によるドイツ美学の隆盛、東洋(仏典)の審美論等について述べ、本論は第一章、美の悟覚、第二章、美の階級、第三章、美感における自在融通の義、第四章、人の個における美、第五章、自在美三要義、第六章、術美の一般詮義、第七章、芸術の二大分類(羈絆芸術と自由芸術)、彫像論概要、絵